虚子記念文学館投句特選句・令和四年十一月

稲畑廣太郎　選

空淋しければ色鳥色残す　岡山　石井宏幸

追憶は師と仰ぎたる冬の雁　鳥取　中村襄介

虚子館は扉を開けて待つ小春かな　新潟　安原　葉

一軸の利休の心炉を開く　大阪　多田羅紀子

落葉して青空ぐんと近づきし　兵庫　田村惠津子

鴨の水決して人に媚びぬ距離　奈良　河村久美子

激戦の地や花芒花芒　兵庫　中井陽子

鳥渡るシベリアの気を身に纏い　兵庫　伊集院秀樹

冴ゆる夜のパイプオルガン音澄めり　愛知　小野　薫

凩や語尾の吹つ飛ぶ下校の子　兵庫　二瓶美奈子

入選句・令和四年十一月

光芒は天使のはしご冬めきぬ　京都　西村やすし
師の句帳観て涙ぐむ暮の秋　大阪　須知香代子
古書並ぶ青空市や文化の日　大阪　河辺さち子
芦屋にて句をよみ海見て松を見る　静岡　佐久間みさき
和紙のいろ六甲旅す秋の土　三重　水越晴子
二度塗りのリップクリーム今朝の冬　奈良　豚々舎休庵
立冬と思ひ厨の謀　兵庫　岩水ひとみ
初冬や村は杜氏に出る支度　兵庫　小杉伸一路
大好きな師を秋惜みつつ回顧　石川　辰巳葉流
眼光の鋭き意志や憂国忌　大阪　西尾浩子
冬日和ホットミルクの薄き膜　兵庫　武田優子
蔦紅葉校舎に響く管楽器　兵庫　永沢達明
ティーショット大冬晴に点と消ゆ　兵庫　涌羅由美
憂国忌鈍き光の日本刀　兵庫　武田奈々（青少年）
色付くも影の暗さや冬日和　兵庫　塚本武州
杜鵑草満開の庭亭午かな　兵庫　辻田あづき
曖昧な色に始まる薄紅葉　京都　山﨑貴子
ぶぶ漬は酸茎にかぎる媼かな　兵庫　槌橋眞美
ガス燈の早灯りたる初時雨　兵庫　辻　桂湖
秋さぶの島の全容近くする　香川　大山孝子
山茶花や控へ目にして誇らしく　兵庫　深尾真理子
虚子館の春秋に降る黄葉かな　兵庫　池田雅かず
故郷見ず三年過ぎたり翁の忌　兵庫　岸川佐江
瀬戸内の波平らかに冬日和　兵庫　中村恵美
俳諧に嵌つてしまひ桃青忌　兵庫　高橋純子
紅葉且散る風もなき日溜りに　鳥取　椋　則子
橡落葉踏んであの日を偲びをり　兵庫　藤井啓子
時雨きて飛沫の走る石畳　奈良　堀ノ内和夫

マロニエの落葉の嵩の降りつもる　兵庫　奥田好子
菊花展すらり美人の勢揃ひ　大阪　高田敏雄
主なき館の桂紅葉かな　兵庫　杉﨑よしこ
汀子師を惜み芦屋の秋惜む　大阪　多田羅初美
冬うららとりわけ笑顔の写真展　大阪　加藤あや
水音に開かぬ門扉や冬に入る　兵庫　横山脩子
山寺の仏に小春の眼かな　京都　杉森大介
凩の缶蹴り遊びしてるかに　大阪　田邉育子
落ち着かぬ時雨の合間雲の色　兵庫　山田将大
庭入れば走り根深く木の葉散る　兵庫　細田清子
芦刈られ鳥の啄む川小春　兵庫　川村ひろみ
重ね敷く落葉の色にドラマあり　奈良　芳林淳子
関西を俳句で撫でる文化の日　大阪　瓦井秀樹
大根焚湯気へ醤油をとくとくと　兵庫　キートスばんじょうし
人待てば館の垣見笹鳴けり　東京　木村三球
鳩歩く小春日和の波止場かな　兵庫　岡本泰志
暮れなずみ散りてまた散る枯葉かな　兵庫　道中義臣
山茶花や道ゆく人の独り言　兵庫　ほりもとちか
山茶花の並べあるやう散りしかな　兵庫　山岸正子
山茶花や師の志深きこと　兵庫　柄川武子
冬めきて靴音固く鳴る夜道　兵庫　金田八江子
山茶花を散らして通る子らの声　兵庫　大西美知子
冬めきて不安と覚悟行き来する　兵庫　山口弘子
小雪や布哇の空は如何ならむ　兵庫　太平楽太郎
地方紙に包まれ届く土大根　兵庫　高市敦之
この冬は淋しからんに虚子館　兵庫　福田光博
冬晴れのチェリーレッドの森をゆく　兵庫　足立朱麻
けむる古都ひとひら傘に冬紅葉　神奈川　小林　心
吉兆の湯立つ大釜里神楽　神奈川　小堀公美子

由緒ある山号寺院冬日和　兵庫　近藤六健

初冬や戦地の色の皆既食　東京　櫻庭　寛

初氷大きな手から小さき掌へ　和歌山　中島紀生

窓を打つ音も幽かに小夜時雨　石川　辰巳昌彦

飛行機雲茜に光る冬の朝　兵庫　阿曽宏之

大綿に生まれ変はつて身の軽し　兵庫　吉村玲子

霜柱理路整然と並びけり　東京　宮村士々

生姜湯に今日の憂いを溶かしけり　兵庫　菅原一真（青少年）

碁敵の待つ路地裏に照紅葉　滋賀　近江菫花

冬温し師を支へたる人あまた　神奈川　進藤剛至

日曜の弥撒のオルガン小鳥来る　埼玉　土井洋子

枯蓮や項垂れ見つむ水鏡　神奈川　金子三奈乃